

いるのは外発的動機づけと内発的動機づけが二律背反的な概念か、連続的な概念かという論争である。その実証的研究として *Between intrinsic and extrinsic motivation: Examinations of reasons for academic study based on the theory of internalization* (Japanese Psychological Research, vol.39, 98-108, 1997) を発表した。この論文が本年度東京学芸大学で行われた日本心理学会で研究奨励賞を受けた。この論文に関しては内外から論文請求がほとんどなく、あまりインパクトがないのかと思っていたが、一定の評価がなされたものと勝手に解釈している。正直なところ受賞前、自分が最年長ではないかとやや恥ずかしいような気もしていた。しかし、現実には自分よりかなり先輩の研究者、同世代の研究者が何人か含まれていたのには驚いた。研究に年齢はない。

2. 総合人間科に関する研究

3年前から毎年、自分が中心になって附属中・高等学校で実施されている総合人間科に関する研究をおこなってきた。1年目は総合人間科に対する学習の動機づけについて、2年目、3年目は総合人間科がどのように役立つと生徒たちは考えているのかという問題について検討してきた。今回の教育課程審議会の答申でも今後、総合的な学習が重視されることは明らかであり、附属の先生たちと時代を先取りしたかたちでこの種の研究が実行できたことは有意義であった。関連論文は以下のとおり。

速水敏彦・田畑治・吉田俊和、総合人間科の実践によ

る学習動機づけの変化 (名古屋大学教育学部紀要-教育心理学科-第43巻, 23-35, 1996), 速水敏彦・吉田俊和・田畑治・安彦忠彦・山田孝, 総合人間科はどのように役立つか (名古屋大学教育学部紀要-心理学-第44巻, 33-44, 1997), 速水敏彦・斎藤真子・山田孝, 総合人間科はどのように役立つか (2) (名古屋大学教育学部紀要-心理学-第45巻, 1998)

3. その他

その他、活字になったものとしては次のようなものがある。

速水敏彦 学校のなかでの仲間関係 詫摩武俊監修 青木孝悦他編 性格心理学ハンドブック 福村出版 794-795. 1997

速水敏彦 自己の探求が自ら学び・考える力や資料の資源になる 河野重男監修 梶田正巳編 教育研修「自ら学び・考える力の育成」9月増刊号 32-35. 教育開発研究所 1998

速水敏彦・浦上昌則・陳恵貞・高村和代 青年が先生から受けた感動体験の内容およびその機能に関する研究 マツダ財団 研究報告書 (VOL11) 19-29. 1998

速水敏彦 補助簿の活用 水越敏行監修 北尾倫彦編 教育方法改善シリーズV 学習評価の改善 150-155. 1998

速水敏彦 樋口論文へのコメント 青年心理学研究 第10号 89-92. 1998

研究状況報告

岡田 猛

1997年10月～1998年10月の研究状況報告は以下の通りである。

(1) 研究業績

印刷中および発行済み (1997～1998)

編著

岡田猛・田村均・戸田山和久・三輪和久編 (印刷中)

「科学を考える：人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点」 京都、北大路書房

論文および著書 (分担執筆)

岡田猛 (印刷中) 科学における共同研究のプロセス：

インタビュー、質問紙調査、および、心理学的実験による検討 岡田猛・田村均・戸田山和久・三輪和久編「科学を考える：人工知能からカルチュラル・

スタディーズまで14の視点」京都、北大路書房
岡田猛・野上康子 (印刷中) 科学的研究におけるコラボレーション：認知心理学の知見から 教育システム情報学会誌

Schunn, C. D., Crowley, K., & Okada, T. (1988). The growth of multidisciplinary in the Cognitive Science Society. *Cognitive Science*, 22, 107-130.

岡田猛 (1988). 仮説をめぐるいくつかの仮説：科学的研究における仮説の役割 丸野俊一編「シリーズ心理学のなかの論争Ⅰ：認知心理学のなかの論争」 京都、ナカニシヤ出版

(2) 学会活動

編集委員

認知科学学会誌「認知科学」1996年～

発達心理学会誌「発達心理学研究」1997年～

Psychologia Society “Psychologia: An international Journal of Psychology in the Orient” 1998年～

シンポジウム企画開催等

カンファレンス “Designing for Science: Classrooms; professional laboratories; and everyday activity” 共同企画者 アメリカ、ピッツバーグ大学学習研究開発センター 1998年4月3日～5日

その他

日本認知科学大会プログラム委員 1998年6月

(3) 招待講演等

日本科学哲学会ワークショップ「科学的発見のメカニズムの解明に向けて：心理学，計算機科学からの提言」
話題提供者 1997年11月

福井大学教育学部附属教育実践研究指導センター 教育講演 1997年12月

日本発達心理学会中国四国地区懇話会 公開講演 広島大学教育学部幼年教育施設 1998年2月

アメリカ、ピッツバーグ大学学習研究開発センター カンファレンス “Designing for Science: Classrooms; professional laboratories; and everyday activity” 話題提供者 1998年4月

日本心理学会シンポジウム「グループは創造的となりうるか？」 シンポジスト 1998年10月

研究経過報告

川上正浩

1996年の11月から1998年の10月に至る2年間の研究成果と研究経過について報告する。この期間のうち、1997年8月から1998年8月までの1年間の間、文部省の在外研究員としてピッツバーグ大学のLRDC (Learning Research and Development Center) に滞在する機会を得た。初めてのアメリカでの生活にとまどいながらも、得るものの多い一年間を過ごすことができた。受け入れて頂いたピッツバーグ大学のCharles A. Perfetti教授に感謝するとともに、留守中ご迷惑をおかけした教育学部の先生方にお礼を申し上げたい。

この2年間、具体的な単語認知過程の検討と同時に、そうした検討を行うための刺激材料の整備に力を入れている。日本語を刺激材料とした実験を行うに当たり、信頼に足るデータベースはまだ十分とは言えない。実験者自身の手による、「使える」データベースの必要性を痛感しており、そうしたデータベースを資料としていくつか発表した。特に、現在のメインのテーマであるneighbor (類似語、あるいは近傍単語) が当該単語の認知過程に及ぼす影響を検討するに当たっては、まだまだ考慮すべき問題は多い。今後もデータベースの整備が必要とされる領域であろうと感じている。

研究としては、日本語の情報処理過程、特に視覚呈示された語の認知に関心を持ち、取り組んでいる。具体的には、欧米諸言語においてneighbor (類似語、あるい

は近傍単語) と言われている「ターゲット単語を構成する文字を一文字だけ他の文字に置き換えることによって作成することが可能な単語」がターゲット単語の認知過程に及ぼす影響に興味を持ち、実験を行っている。また本学人間情報学研究科の齋藤洋典教授らとのプロジェクトとして、日本語学習支援システムの開発を行った。漢字認知過程に関する知見に基づき、初学者が楽しんで学習に参加できるよう、漢字部品結合ゲームを具体化した。共同研究、分担執筆も含めて、この期間に以下の発表を行った。

川上正浩 1996 仮名3文字で表記される非単語の類似単語数表 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 43, 187-220.

川上正浩 1996 語彙判断課題における非単語の類似語数の効果 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 442.

藤田知加子・川上正浩 1996 漢字仮名混じり語の認知ユニットが文字検出課題に及ぼす影響 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 441.

川上正浩・増田尚史・齋藤洋典 1997 部品による漢字の構造化と漢字学習支援システム 信学技報, TL 96-10, 13-23.

齋藤洋典・川上正浩・増田尚史・山崎治 1997 インテ